実　施　報　告　書

講　座　名	キラッ☆とよた＆あいち男女共同参画財団共催　サテライトセミナー （男女共同参画基礎講座）　男性が介護に向き合うとき
日　　時	平成２９年２月１６日（木）　午後１時３０分から午後３時３０分まで
場　　所	豊田市青少年センター　交流室（豊田産業文化センター４階）
参加者数	７７人
講　　師	津止　正敏　さん（立命館大学産業社会学部教授）
内　　容	始めに　１９９５年の育児・介護休業法成立から２０年が過ぎ、「介護と仕事」の社会問題化が表面化している。ビジネス誌が介護離職や隠れ介護といったことを特集記事にしている。 １　男性介護者（ケアメン）のネットワークの誕生 ２００９年３月８日（日）に京都の立命館大学で北海道から九州まで１６０人が参加して発足した。１５２人分の介護体験記が集まり、それを介護の経験知として社会の共有財産にすることに取り組むことになった。 ２　盛況の「ケアメン」イベント 男性介護ネット７周年記念イベントを始め全国でケアメン関連のイベントが１００か所を超えて実施されている。 ３　なぜ、今男性介護者の会の組織化が盛況なのか 一つ目は、介護が関係する事件（虐待等）や介護者等の孤立等など問題が山積していること。二つ目は、「これらの問題を何とかして欲しい、しなければ」と気付いた人たち（当事者、メディア、支援者、支援機関等）がいること。 ４　新しい介護実態の出現 ①誰もが介護する又は介護されるという暮らし方をする時代になった。 ②想定された介護の形（若くて、体力もあり、家事も介護も介護に専念できる時間もあって介護者規範もある）は想定外の形（若くも体力もない、家事も介護もできず、時間もない、介護者になって戸惑う）へ。 ③通いながら、働きながらの介護に変容した。 ④介護感情の両価性の存在（介護は大変だが、つらいことばかりでもない） 終わりに　「介護を排除して成り立つ暮らしや働き方」から「介護のある暮らしや働き方こそが社会の標準」へ
参加者の声	・介護から「逃げる」「排除」する選択ではなく、生活の中心に据えて生活していく生き方もある。どこかで育児にも通じると心から思った。 ・介護は一人でかかえ込まない。いつでも SOS、多くの人に SOS。多くの支援者がいる。みんな気遣ってくれる。 ・地域に介護が必要な方、孤立しがちな家があります。声をかけたいけど、おせっかいと思われるとも思うのでかねあいが難しい。皆で声をかけたい。
担当者所感	参加者の９６％が６０歳以上であり、介護が身近なテーマであったことが感想からも分かりました。また、一般参加者の参加動機も「タイトル・講師」が最多であり、今日的なテーマであると思いました。在宅介護において多くの課題がある中で、つらいことばかりでない、介護のある暮らしこそ人生をより豊かにしてくれる新しい生き方モデルではないかという講師の指摘は男女共同参画の点から示唆に富んでいました。